

教職課程年報第 2 号の刊行にあたって

堤孝晃（八千代キャンパス教職課程専門委員長）

東京成徳大学教職課程年報の第 2 号を無事に刊行することができた。ご尽力いただいた各所には、心より御礼申し上げたい。

現在、本学では、子ども学部と人文学部において教員養成を行っている。保育士および教員の養成を主眼とする子ども学部での教職課程は、平成 30 年度の新課程の認定を受け、ますますの充実が図られている。一方、人文学部における教職課程は、平成 30 年度の新入生が最終学年となる。平成 31 年度から国際学部が新規に開設されることに伴い、人文学部としての学生募集が行われなためである。人文学部の教職課程がなくなることについては寂しさを感じると同時に、最後のひとりの学生まで、子ども学部同様に最大限の教育・支援を行うべく、気を引き締め直すところである。

教職課程における教育は、教育についての教育を行うという意味で、ほかの大学教育とは違った難しさをもつ。教職課程の教員が、「教育とは」という教育一般を指す大きな主語を用いるとき、当の教員が行う教育そのものがいかにあるのかが、自身の語った教育的観点からただちに問われ直すためである。内容や方法はもちろん、教員の人格にいたるまで、とりわけ「教育はかくあるべし」と規範を説く際には、反省的に自身を評価対象とせざるをえなくなる。また、教職課程の学生たちは、真剣に取り組む学生であればあるほど、そうしたメタ教育的な観点で私たちを的確に、しばしば厳しく評価する。しかし、教職課程における教育もまた、その他のすべての教育と同様、本質的に不確実であり、完全に成功することはありえない。だからといって私たちは、教育を教育することを、単にやめてしまうというわけにはいかない。そうだとすれば、近年強調されるようになった「学び続ける教員」という理想像は、教職課程を担当する私たち大学教員にこそ、鋭く差し向けられているといえる。

本年報が、そうした教職課程教育の洗練に、少しでも貢献することができれば幸甚である。

2019年 3月